

コリント人への手紙第二2章 「悲しみと不安の中で」

1A 喜びのための協力 1-11

1B 悲しみの手紙 1-5

2B 罪の赦し 6-11

2A 開かれた福音の戸 12-17

1B テスに会えない不安 12-13

2B キリストの凱旋 14-17

本文

コリント人への第二の手紙2章です。私たちは前回、1章の後半で、パウロが、自分の計画の変更を批判されていることを踏まえて、その弁明をしているのを読みました。それは、パウロが、エペソからマケドニアを経てコリントに行く計画を立てていたのですが、先にコリントを訪問したテモテから、おそらく報告があり、状況が悪化していることを知ったからでした。それは、コリント第一の手紙5章にあった、近親相姦の罪を犯している男を教会がそのままにしていたことです。それで、パウロは、エペソからそのまま船に乗ってコリントに訪問して、この問題に対して厳しい処置を行ったようです。それで、エペソに戻ってから、今度は新たに手紙を書き、それをテスに託したようです。そして、自分はトロアスに向かいました。トロアスで、コリントから戻って来るテスに会って、コリントの状況を聞きたかったのです。ところが、予定した時期にはテスはトロアスに来ませんでした。それで、彼は船出してマケドニアに行きました。そこでテスに会うことになり、そこで、コリントの人たちが、正しい対応をしているのを聞いて、深い慰めを得たということです。

それで書いたのが、このコリント人への第二の手紙です。（「第二」とありますが、それは二通目ということではありません。数あるパウロの手紙の中で、第一の手紙と第二の手紙が新約聖書の中に残っているということです。）そのため、第二の手紙には、パウロの弱くなっている心がよく表れています。なぜ弱くなっているのか？彼が、コリントの人たちのことをこよなく愛しているからです。愛というのは、自らを脆くする行為です。使徒に与えられた権威を使えば、パウロはいくらでも、コリントの人たちをサタンに引き渡すことさえできました。けれども、パウロにとって、コリントの人たちは霊的な子どもたちです。彼の福音の働きで、新しく生まれ、神の子どもとされた人々です。だから、自分が悲しんだり、不安になっていることまでも、自分の心を包み隠さず知らせていきます。

前回、彼がコリントにすぐに行かないことは、思いやりから来ていることを話しました。そしてこう言います。「1:23 私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。」喜びのために協力して働く者だと言います。コリントの教会にある罪に対処しなければならなかったのですが、それは、あくまでも真実な喜びに至るものだと確信して、パウロは取り組んでいました。

1A 喜びのための協力 1-11

1B 悲しみの手紙 1-5

¹そこで私は、あなたがたを悲しませる訪問は二度としない、と決心しました。²もし私があなたがたを悲しませるなら、私が悲しませているその人以外に、だれが私を喜ばせてくれるでしょう。

パウロは、彼らを悲しませる訪問をしたことを言及しています。これが、直接エペソからコリントに訪問した時のことです。彼は、コリント人への第一の手紙で、この男を取り除きなさいと強く促していました。「5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」そして、「5:13 外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」取り除きなさいという指導をしています。それが、第一の手紙だけではできなかったので、パウロが直接出向いて、何らかの処置をしたのだと思います。

しかし、これが彼の目的ではありません。その罪を犯している人自身が、自分のしていることを悔い改め、神に立ち直ることができるために、一時的な悲しみをもたらしたのです。罪を犯している者に戒めを与えることは、とても悲しいことです。けれども、パウロが「彼の霊が主の日に救われるため」と言ったように、その人に救いの喜びが戻って来るには、罪を言い表し、その罪を捨てる以外に他はないのです。ダビデが、バテシェバとの姦淫の罪を犯した後で、このように祈りました。「詩 51:10-12 神よ私にきよい心を造り揺るがない霊を私のうちに新しくしてください。11 私をあなたの御前から投げ捨てずあなたの聖なる御霊を私から取り去らないでください。12 あなたの救いの喜びを私に戻し仕えることを喜ぶ霊で私を支えてください。」罪を告白し、罪を捨てることで、初めて救いの喜びが戻ってくるのです。

³ あの手紙を書いたのは、私が訪れるときに、私に喜びをもたらすはずの人たちから、悲しみを受けることがないようにするためでした。私の喜びがあなたがたすべての喜びであると、私はあなたがたすべてについて確信しています。

「あの手紙」というのは、コリント第一のことを指しているかもしれませんが、たぶん、先ほど話したように、コリントを訪問した後で、厳しい処置を敢行させるための手紙を書いたのだと思われる。それをテトスに託したのだと思われます。それは、非常な悲しみをもたらすものでありましたが、同時に、パウロは、コリントの教会の人が正しく応答すれば、真実な喜びを取り戻すことができるという期待も大いにしていました。

そして彼らの喜びが、自分自身の喜びなのだと言っています。彼は、コリントの教会の人々と、キリストのからだとしてつながっていることを強く意識していました。「I コリ 12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」私たちが、他の教会の仲間が起こったことが、他人事ではないと感じているでしょうか？

もし感じていたら、みなさんはキリストのからだということが、良く分かっていることになります。

⁴ 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があるあなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした。

手紙というのは、文面だけ見れば、その背後にある語調までは聞こえませんから、そこで誤解が生まれます。読み手の心の状態によって、同じ言葉であっても、その受けとる内容が変わってしまうのです。パウロの書いた手紙は、文面だけ見たら怒っているように見えます。けれども、パウロは怒っていませんでした。涙でくしゃくしゃになっていた顔で、悲しみながら、手紙を筆記してもらっていたのです。コリントの人たちのパウロに対する批判は、彼の問題というよりも、彼らが勝手に心をパウロに対して狭くしてしまっているからです。同じことを言っても、自分の心がすでにパウロに狭くなっていたので、悪意があるように聞こえたのです。

同じように、私たちは、神さまが自分に対して怒っているように感じる場合があります。神のことばを読むときに、神は怒っており、自分に罰を与える方であるかのように読む場合があります。例えば、創世記3章において、罪を犯したアダムを探して、神は、「あなたは、どこにいるのか。」と言われました。そのとき、怒っている神を思い浮かべてしまうのですが、涙を流している心痛める父のような叫びだったのではないのでしょうか。パウロも、自分があのような手紙を書いたのは、涙がぼろぼろ出て、鼻水も垂れているようなところで書いたのですよ、ということを伝えているのです。

⁵ もしある人が悲しみをもたらしたのなら、その人は私を悲しませたのではありません。むしろ、言い過ぎにならないように言えば、ある程度まで、あなたがたすべてを悲しませたのです。

コリントの人たちは、もしかしたら、誤解していたのかもしれませんが。この近親相姦を犯した男は、パウロに対して罪を犯して、それでパウロが厳しく対処したのだと思っていたのかもしれませんが。その男がパウロに悪態をついていたとか、そういったことがあったのかもしれませんが。しかし、パウロの心はそういうものではありませんでした。牧会者の心です。自分のことではなく、コリントの教会の人々にとって、このことは悲しみであり、パウロは彼らのために、彼らに変わって罪に対する悲しみを、先の手紙で言い表したのです。

こういった誤解は、しばしばあります。罪を犯している人が教会の中において、牧者が厳しく対処します。そこで牧者の心を誤解してしまって、その罪を犯している人と牧者の間に、個人的な問題があるのか？と思ってしまうのです。なぜ、そこまで厳しく対処するのか？それは、自分に嫌なことをされたからではなく、第一に、その人が罪から離れることができるようにするためです。第二に、教会全体のことを思ってであります。その罪によって、教会が痛みます。対処しなければ、教会全体が悲しみに陥ってしまいます。だから、代理のようにして厳しい対処を取るのです。

2B 罪の赦し 6-11

⁶ その人にとっては、すでに多数の人から受けたあの処罰で十分ですから、⁷ あなたがたは、むしろその人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。

コリントの人たちは、パウロが指示したとおりに、教会から取り除いたようです。それで、彼は、自分の犯していた罪がどれほどのものであったかを悟ったようで、その悲しみに押しつぶされそうになっていました。パウロは、ここで赦して、慰めてあげなさいと勧めています。

コリント第一 5 章で学びましたが、罪を犯して悔い改めない者に対して、教会からその人を取り除くことを教会戒規と言います。それは決して、彼が滅びるためではなく、むしろ罪から離れて、霊において救われるためであります。罪から立ち返るために、自分の犯している罪を自ら刈り取るようにするということです。主にある交わりは、私たちにとって霊的な空気のように、空気のありがたさは、空気を吸えなくなった時によく分ります。交わりから外されて、彼はサタンの思うままに、痛めつけられていたのです。放蕩息子が、何も食べるものがなくなって、豚の世話をして、豚の食べているえさを食べたいほど空腹になって、それで我に帰りましたね。コリントの人たちは、処罰を与えましたが、今はもう罪を赦し、慰める時になったのだとパウロは言っています。

⁸ そこで私はあなたがたに、その人へのあなたがたの愛を確認することを勧めます。

彼が罪の責めを受けていた分だけ、慰めが必要です。愛していることを確認してあげなければいけません。「I ペテ 4:8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」そして、イザヤ書 40 章には、二倍の慰めについて書いてあります。「40:2 エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」罪に代えて、それ相応の慰めでは足りないのです。二倍にすることによって、初めて心に受けた傷を癒やすのに足るのです。つまり、十分に慰め、赦しと愛を確認するのです。

⁹ 私が手紙を書いたのは、あなたがたがすべてのことにおいて従順であるかどうか、試すためでした。

パウロは、教会にあった、この罪の問題について、彼らが正しく対処するかどうか知りたいと思いました。それは、自分のためではなく、彼らが、主イエスが命じられたように、罪を犯している兄弟を戒めるかどうか、イエス様の弟子として生きているかどうか、彼ら自身が知る必要があります。パウロは、その機会を与えたのです。あいまいにしたまま、このことを過ぎ去らせたなら、彼らの霊的成長がなくなります。明らかにして、彼らがきちんと、主の願われているように動くことができるように、手助けしたのです。

¹⁰ あなたがたが何かのことで人を赦すなら、私もそうします。私が何かのことで赦したとすれば、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。

今、パウロは彼らと歩調を合わせています。パウロは、すでに、彼らの使徒として、指導者として、その男について、キリストの御前で赦していました。けれども、これが彼の一人芝居になってはいけないうし、パウロが赦したのだから、私たちもやむを得ない、赦さないといけないうか、というような、パウロのワンマン経営のような指導であってはいけないうのです。そうではなく、コリントにある教会に、神から与えられた権威があるのです。彼らが赦すということが大事であり、それによって、その交わりに、罪を犯した男が戻ることができます。その決定に私も合わせます。とパウロは言っています。先に、1章の最後の言葉を読みましたね。パウロは、彼らの信仰を支配するものではなくて、彼らの喜びのために協力して働く者なのだ、ということです。彼らが信仰に堅く立っている、つまり信仰的に自立しているからだ、ということなのです。

¹¹ それは、私たちがサタンに乗じられないようにするためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。

ここで言っているサタンの策略とは何でしょうか？それは、罪を明らかにするのは聖霊の働きですが、悔い改めたのに、それでも残っている罪責感を利用して、いつまでも罪を責め立てるのが、サタンのすることだからです。聖霊は、罪を明らかにして、キリストにある罪の赦しへと導きます。キリストが十字架につけられたのは、あなたのこの罪を赦すためでもあったのだと教えます。しかし、サタンは、その赦しを否定します。赦されることはないのだ、と、そそのかします。

罪を赦すというところには、高度な霊の戦いがあると言ってよいでしょう。そこには、多くの偽りが付き物だからです。初めに、赦すことと許可することは大違いだということです。音では、日本語で、赦免の赦すと、許可をする許すでは同じ発音です。しかし、聖書が罪を赦しなさいという時は、赦免のほうの赦しです。しかし、同じ発音なので、クリスチャンでさえが、混同しています。神は決して、罪を許容することはないと教えます。罪は神の義にしたがって対処しないとけないうのです。

ここで、進藤達也牧師の書かれていたことを引用したいと思います。彼は元ヤクザで、牧師になった人です。今は、教会を牧会しながら、刑務所にいる人々をイエス様に導いたりする働きをしています。そのため、多くの被害を受けています。立ち直ろうとしていても、彼の行った善に対して悪で報いる人々も多くいるのです。罪の現実について、良くわきまえておられる方なので、彼の書いていることはとても知恵があります。

「[進藤龍也(聖書)の赦しの基準]

あなたの悪い行いは許さない。

しかし、あなたという存在を赦すため、あなたを愛し、あなたが正しくなるために、しなければならな

いことがある。それが謝罪であり、賠償である。

しかし私は、あなたが謝罪しなくても、賠償しなくてもあなたを無条件で赦します。なぜなら私も主イエス様によって無条件で赦され、愛されているからです。

また、相手の謝罪などを条件に赦すならば相手に私の心が支配されていることになるから、無条件で赦すことにする。

しかし、謝罪もない人は信用できないので、お付き合いはしません。あなたが神に立ち帰ることを祈ります！ということになる。」¹

非常に成熟した、知恵のある対処です。先に私も話しましたように、悪い行いは決して許してはいけません。けれども、その人の存在を認め、愛することはできます。無条件で赦すことができます。しかし、自分のためではなく、その人自身のために、謝罪と償いが必要だということです。自分はすべて赦していますから、償いは必要ないかもしれない。けれども、本人が霊的に正しくなるために必要なのです。けれども、謝罪しない人がいます。悔い改めない人がいます。そういう人は、神に立ち返ることは祈るけれども、信用できないので、付き合いすることはできないということです。悔い改めがなければ、罪の赦しもなにもないですから。その罪が残ったままですから。

2A 開かれた福音の戸 12-17

ここまでが、その近親相姦の罪を犯していた男についてのことですが、パウロは、コリントから戻ってパウロに会うはずのテスに会えなかった時の気落ちについて話します。

1B テスに会えない不安 12-13

¹² 私がキリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いておられました。が、¹³ 私は、兄弟テスに会えなかったので、心に安らぎがありませんでした。それで人々に別れを告げて、マケドニアに向けて出発しました。

パウロは、エペソからトロアスに北上しました。車ですと、5 時間ぐらい北上します。エペソもトロアスも、エーゲ海に面する貿易都市です。トロアスで、コリントの人たちがどのように自分の手紙を受け取ったかを、テスから聞くことになっていました。トロアスに着きました。そこでも、福音を宣べ伝えていました。主が戸を開いておられて、実を見ることができました。ところが、テスに会えません。それで、第二次宣教旅行の時に、そうであったようにトロアスからマケドニアに船出して、そこでテスに会えないかと思ったのです。

ここで彼が、正直に心の内を明かしたのです。「心に安らぎがありませんでした」と言っていますね。これがパウロの心だったのです。彼はコリントの人たちを愛しているから、自分の手紙を読んで、自分が意図したように受け止めてくれたか心配でした。自分の真意が伝わっているか？彼ら

¹ <https://www.facebook.com/churchlhc/posts/7729503800408272>

は、みこころにかなったことを行ったか？いろいろ逡巡したことでしょう。人が愛する時に、このようにして悩むのです。問題があって、それに対処する時に、何一つとして教科書的解答はありません。神の憐れみのみによって、前進することができます。

ところで、パウロは驚くべきことを、この手紙でしています。この後、マケドニアでテトスと会うことができたのですが、その話はなんと、7章5節から始まるのです。話の続きを知りたいければ、7章5節以降で読んでいかないといけないのです。ここ2章14節から7章4節までは、パウロが、福音宣教者として、使徒として、神からの資格が与えられている者であることを説明し、弁明している箇所になります。コリントの人たちの一部に、パウロは信用ならぬ人だ、真正な使徒ではないという者たちがいたからです。そして、そういった彼らを煽っている偽使徒たちがいました。彼らのしていることは、肉の判断によるものでした。見た目で、パウロを判断していました。例えば、計画の変更について、前回、1章でパウロが、「はい」と同時に「いいえ」であることはできないとして弁明したことを思い出してください。ここから、福音宣教の働き、主に仕えるということ、そのあり方について、私たちはじっくりと、学んでいくことができます。

2B キリストの凱旋 14-17

¹⁴ しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちがキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。

午前礼拝でお話ししました。パウロは、心が安らぐことなく、気落ちしているような中にあっても、それでも、実は、キリストが勝利してくださっているということを知りました。自分の心がこれほどまで弱まっているのに、それでも、主は高らかに凱旋をしておられるのです。

ローマで、外国の地を征服した将軍が、王であるかのように四頭の白馬に引かれる戦車に乗ります。自分の頭上には、月桂樹の冠があります。自分の前には分捕り物が更新します。鎖でつながれた敵が、捕虜として行進に加わっています。そして宝物があります。他の兵士たちも連なっています。そして、これらのものを、将軍がローマの神々に奉獻するのです。パウロは、キリストが、霊の勢力をことごとく征服され、凱旋し、父なる神に分捕り物、つまり、救われた魂を献げること、その凱旋式に投影させたのです。

パウロは、同じ凱旋式のことを、第一の手紙でも話しています。そこでは、使徒たちが、捕らえられて見せ物になっている者たちとして語っています。「4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。」捕らえられた敵は、公開処刑されたり、競技場で獣と戦わせられたりするためにありました。自分たちが、いかに卑しめられているかをここでは語っています。

しかしパウロは、このことさえも肯定的に見ているのです。自分たちは、人々から笑われ者になっている。迫害を受け、殺されるかもしれない。しかし、それは、キリストに捕らえられたからなのだ。これは光栄あることなのだ。人間の将軍ではなく、主の将軍であるキリストに捕らえられたのだ。この方の囚人になっているのだ。事実、主ご自身が、囚人として世の見せ物として、十字架の道を歩まれたのではないか。敗北者のように見えて、実は、キリストの凱旋の行進にあずかっている恵みに預かっているのだ、ということです。弱さの中に、むしろキリストの強さが現れます。

コリントの人たちは、肉による評価をしていたので、それで、パウロを見て、使徒としてなっていないと判断してしまいました。彼は、失敗者であり、敗北者なのだ。しかし、実は、キリストの凱旋の行列にあずかっている人なのです。

そして、キリストの知識を知る香りが、自分たちを通して放たれていると言っていますが、行列では、ローマの神々に献げる香がたかれます。行列には、この香の香りは付き物であり、パウロたちが福音宣教をしている時に、その宣教のことばからも、彼らの生き方からも、キリストの知識の香りが放たれていました。

¹⁵ 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。

ここで大事なものは、キリストを知る知識の香りは、救われる人々の中にあるだけでなく、滅びる人々の間にもあるのだということです。コリントの人たちはおそらく、人間的に考えていたことでしよう。人々が受け入れられるもの、信じて救われることを伝えることが大事なのだ。だから、世の知者と言われている人々を重んじました。しかし、パウロたちの働きには、信じて受け入れる人々もいるけれども、いつも反対者が出てきます。迫害があります。だから、パウロは何か行き過ぎたことを語っているのではないか？そのように否定的に見ていたことでしょうか。

しかし、パウロは第一の手紙の初めのところではっきりと言いましたね。「1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」福音のことばを聞いて、信じないで滅びる者たちもいるし、滅びる者たちが出てくるということなのです。イエス様ご自身が、その語られることばによって、人々が真っ二つに分かれました。信じる人たちと、拒む人々です。主は、四つの種類の土の喩えで、同じみことばでも、道端に落ちた種のように、全く受け入れない人たちもいることを話されました。そして、使徒たちは、主イエス・キリストのしもべであり、この方の命じられることを行うのみであり、ゆえに、キリストの凱旋の行列で、自分たちは縛られた捕虜なのです。

パウロたちが集中していたのは、あくまでも、神に対して献げているということです。「神に献げられた芳しいキリストの香り」と言っています。祭司が主の前で香をたくのですが、神に対して行われ

ているものです。多くのキリスト者が、いかに人々に福音を受け入れられるか？ということを経験にして、行動していることがとても気になります。もちろん、私たちは身の回りの人々に親切にしたいといけません。しなければいけない仕事があります。けれども、自分自身がキリストを主とするところこそが、キリストの香りが放たれる第一条件なのです。

私が信仰を持って間もなく、こんな疑問を持ちました。「自分の愛する人にイエス様を伝えるならば、日曜日に礼拝に行って、家を空けたら、悪い印象を残してしまうのではないかと？主に礼拝を献げることは、わがままなことなのではないか？」と思ったのです。しかし、その思いは思い上がりであることを悟りました。まず、自分自身が救い主なのか？ということです。自分が身の回りにいる人を救うのではないのです。そして、主を礼拝することによって、初めて主が自分を通して生きて働いて下さり、周りの人々に証しとなります。

¹⁶ 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいどれでしょうか。

香りについて、ローマの凱旋式では、将軍の周りにいる兵士たちにとっては、その香りは自分たちにとって光栄な香りであり、勝利、救いの香りです。けれども、鎖につながれて捕虜となっている者たちにとっては、自分たちが死に定められていることを思い出すところの香りです。同じ香りですが、救いにも至りし、滅びにも至ります。福音の中に生きること、福音を伝えることは、厳かな務めです。その働きによって、人々が滅びに定められることもありますし、また、救われて生きるようにされる人々もいるのです。生きるも死ぬも、自分の働き次第なのです。これは、あまりにも畏れ多い務めです。生きるも死ぬも、手術の執刀医にかかっているという生々しい現実を人々は語りますが、福音を伝える者たちは、それ以上に、生きるも死ぬも、自分たち次第ということです。

しかし、繰り返しますが、医者の場合は、生かすことが使命ですが、福音を伝える者たちは、必ずしも生かすことが目的ではありません。福音を伝えること自体が目的です。その中には、死に定められ、滅びる人々もどんどん起こされます。罪の中から神に立ち返り、生かされ、永遠のいのちに定められる人々も起こされます。これは主が行われることですから、私たちは一切、手を出すことはできないのです。私たちはただ、福音をそのまま、ありのままに伝えることだけなのです。拒んで行ってしまう人々を見るのはとても辛いことです。伝えたら、これまでキリスト教に好意的であった人が、一気に福音から遠ざかる人々が多くいます。ああ、何か悪いことをしてしまった。元々、伝えていなかったら、そのように心を閉ざすことはなかっただろうに、と後悔の念にかられるかもしれませんが、パウロによると、それは神にとっては想定済なのだということです。

それで、パウロにとって、この務めがあまりにも畏れ多いので、「このような務めにふさわしい人は、いったいどれでしょうか。」と言っています。そうなんです、自分はあくまでも、キリストにとらえられた者たちです。けれども、周りでキリストが高らかに凱旋しておられる姿を見ます。こんな大

きな務めにふさわしい人などいない、と言っているのです。自分が自分で把握している以上に、神が自分を大いに用いておられます。神の恵みであり、全く釣り合わないのです。ちっぽけな自分がいるのに、大きな神が大きなことを行ってくださいます。それが、福音の働きです。

¹⁷ 私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです。

ここでパウロは、コリントの中に潜む偽使徒、偽教師たちのことを思いながら話しています。主のしもべとして、ただ主の言われていることを伝えるのが努めです。そこには、救われる人も起こされるが、滅ぶ人たちも起こされます。主イエスご自身が人々を二分したのですから。ところが、人々が受け入れられるようにするのはどうすればよいか？ということが念頭にあるので、神のことばをそのまま伝えるのではなく、混ぜ物をしているのです。世の知恵を混ぜ合わせて、それで伝えていました。私たちにも、その誘惑はいつもあります。救われる人がなかなか起こされないでいるとき、私たちは、もっと受け入れられるように語るべきだと思ってしまう誘惑があります。

しかし、私たちに必要なのは、まず「誠実な者」であることです。人前で、いかにも自分が霊的であるかと繕わないことです。人に良く思われるという動機でクリスチャンをしない、ということです。そうすると、繕っているクリスチャンとしての姿があって、本当の自分がいて、そこに乖離が生まれます。これを偽りといいます。イエス様が何度となく、「これはパン種だ」と言われた偽善です。

次に、「神から遣わされた者」であることです。自分でこういうことをしたら、こうなるというものではなく、神に言われたから、命じられたから、召されているから、応答としてこれこれのことをしているのです。ある人から、こんな話を聞きました。ある教会が、とても海外宣教に熱心で、説教の中で、「あなたの飲んでいるコーヒー一杯で、一日の食べ物を与えることができる。」という言葉聞いていたそうです。そんなことをしたら、日本における生活そのものができなくなってしまいます。いいえ、福音の働きは恵みの働きです。主がただ、行きなさいと命じられるから行くのみです。その働きが自分に拠っているのではないのです。自分に関わらず、主が大いなることをしてくださるのです。ですから、召されているということが大事なのです。

そして、「神の御前でキリストにあって語る」ということです。人々の前で語っているのですが、本質的には、神の前で語らせていただいています。このことを忘れると、いかに人々に受けの良いことを話すか？という動機が働いてしまいます。人目が気になり、忸度して語るようになり、全然、神の前で芳しい香りにならなくなってしまいます。自分自身が、神に献げられた者であることをわきまえます。

今回は、この務め、福音の務めの大きさ、栄光ある働きであることをパウロは話します。